





貴介問答卷之三目錄

- 一 神武天皇シムム上下共カミ一人ヒト号ナヅケすハ如何ニと云ハ奉ル初ハツ丁メ
- 一 神武天皇シムム血ツキわキりて戦タカ々カワ如何ニと云ハ奉ル五イ丁メ
- 一 吾朝ワカより異朝イに征ウツて真マコトと上ウる奉ル何ニの世ヨより始ハジまるル八ヤチ丁メ
- 一 景行天皇ケイカウ熊襲クマシロと伐ウチつる奉ル十トウ丁メ
- 一 日本武尊ヤマト東夷トウイ征伐セイハツ々如何ニと云ハ奉ル十三トウ丁メ
- 一 神功皇后シニ三韓シウシウコウに退治タイヂする奉ル十九ジュウ丁メ

貴介問答

目錄



貴介問答卷之三

○問曰。神代より天子より庶人よりあまたし。神と號し。神武天皇より人王と稱じて。上下共ぶ人と號するは如何。

答曰。神なる形より上の名。人なる形より下の名也。形の上との理は言。形より下とは。氣といふ也。恭惟よ。夫神代天照皇大神は。これ柱以て。天上は治りふと。万歳々々。これ柱とい。三種の神器。全備て。未三と別がられ。徳は云。行し事々。中道より叶。玉のびく温潤ありて。仁惠分らずしふしあり。素盞鳴尊。天上は棄しと云ふ。







よみ血ぬすずして治をゆく神代と名也。是神徳  
の盛なり。あつども。神武天皇。昔不合尊の子。三  
種の神器受継しつども。時欽命欽玉鏡代徳衰て。  
寶劔の事及び。終よ刃に血わりて。天下代治あり  
し。人皇と始て称ども。是を人皇形し。下の若し  
多の上は従下かかよりりて。庶人をも統て人といふ。  
凡そ下は万機々。皆事理と以て立。神代といふも。事  
かきよあつども。玉鏡の徳盛。行とハ。寶劔の理。下と  
して靡すといふも。人皇の時。玉鏡の徳衰ゆ  
る。寶劔の理。下に用ども。神武天皇。已とハ

得ども。刃に血ぬり。寶劔の事に落て。人を殺したまひ  
従ふものハ。征と。是本朝。劔はみく不従者と殺を  
軍陣の始也。是より。天子の勅は背一人と。軍代起  
て其罪伐也。玉鏡と。中体少して。陽徳かゆ。故  
宝劔の理を帥也。神明も亦中体少して。陽徳かゆ。故  
よ。玉鏡の徳といふ。宝劔の理を卒ひ。天地同躰の  
神と。吾よ保。天地の運。則て終よ。寶劔の事及び  
か。下は治め。性命代養あり。壽も數千万  
歳を包む。異朝少も。盤古王代時。人ハ壽窮分  
き。人皇より。陽徳衰ゆ。氣代養あり。



と人專モソクうして漸シヅカ神靈カミは福トクあり。寶劔タカラ中躰ナカニ  
此理コノコトは兼カミ收歛シウレンの氣キは備刑タテマツル戮ウチれ事コトは行ユクもの也。  
人皇ヒトミカド天地チノチの氣キは則スレバ了マツル。陰陽インヤウは共トモ。天下テンカは治チあり。史シ  
也。終オヘは寶劔タカラの事コトに及およて。人ヒトと刑戮ケツして天下テンカ治チ  
也。陰陽インヤウは共トモ。性命セイメイは養ヤウあり。氣キは限カギありものあり。也。  
大形オホガタは壽スき百歳ヒャクサイのことなり。禮記レイキも百年ヒャクネンと期キ  
してあり。黃帝ワウテイも上古コノコトの人ヒトは百歳ヒャクサイと踰ユて。動作ドウサ  
衰オロむ。今時イマトキの人ヒトは百歳ヒャクサイにして動作ドウサ衰オロむものあり。也。  
百歳ヒャクサイ有余ユヨの人ヒトも。其人コノヒトの氣キは有余ユヨなり。神武カムヤマト  
天皇ミカドも神明カミの御兒ミコなり。壽漸スナハチ百七ヒャクナナ有余ユヨ也。

然シカドに盤古ヒヤクコ神カミ代トキの時トキも。壽スの一本イツポン。三皇サンワウ人皇ヒトミカドは時トキも壽ス  
は百殊ヒャクシツなり。いん。皆ナラ是コノコト上古コノコトの神カミ代トキ養ヤウ。末世マシの氣キは  
養ヤウの差サカなり。神カミ代トキも。神明カミの御世ミヨなり。百民ヒャクミン  
其德コノチカラは化カして。形カタも上ウヘの理コトと養ヤウも上ウヘなり。上下ウヘノタテ共トモなり。  
神カミと名ナつとも。人皇ヒトミカドなり。寶劔タカラの事コトに及およて。上皇ウヘノミカドも形カタ  
も下シタの氣キと心ココロで。治チあり。上下ウヘノタテ共トモなり。人ヒトと名ナは  
て。壽ス長短チヤウテンの不同コト大也オホクなり。壽スは神明カミの及および  
も。吾オレ神明カミの心理ココロと鑑カミむ。今イマは世ヨも。神カミ留トモり  
も。子コや。いん。孔子コウジも周シュウの末マシに生ナて。盤古ヒヤクコも伏羲フウキ  
神カミ農ノウ黃帝ワウテイ堯舜ヤウシュンの道ミチに及および。十二ジュニ諸候シヨウコウに説トクする人ヒト。

續前胡卷三



孟軻も。戦国の時。出て。義を以て。七色八君。進音  
朝中。天兒屋根命。中臣枝と以て。一人合一神  
理と傳ふ。舍人親王の神代卷。天照皇大神。  
三種の神器の。深意は。顯し。多し。仁。是。曲玉。義も。  
是。寶劔の理。よ。わ。ず。や。曲玉。宝劔の理。を。一。よ。と。れ。ん。  
鏡の中道。非。や。三種の神器。を。互。地。充。塞。の。具。  
宝。久。し。も。天子。り。庶。人。に。到。り。て。備。ず。し。よ。と。も。  
是。神明。聖。人。教。と。立。て。根。本。に。今。の。世。よ。生。ま。り。て。も。  
人。の。人。の。道。と。由。る。べ。神明。と。吾。よ。存。せ。ん。と。終。り。  
か。し。最。神。と。い。ひ。り。ん。只。は。一。と。い。ふ。と。拜。と。い。ふ。

神明聖賢の教也。

問曰。人王の最初神武天皇。劔を血わりて軍を  
事如何

答曰。河内國長髓彦代伐て。饒速目命代從。ま  
夫神日本磐余彦天皇。神武天皇と彦波瀲武鸕鷀  
草薙不合尊の弟四乃子也。母は玉依姫と云。海童の  
少女也。天皇生かすに。明は達く。意確如也。年十  
五。して。立。て。太。子。と。成。り。長。て。目。向。國。吾。田。邑。吾。平  
津。姫。と。娶。て。妃。と。す。手。研。耳。尊。代。生。る。魚。の。年  
四。十。五。歳。よ。及。て。諸。の。兒。及。子。等。と。謂。曰。昔。我。天。神。高

續前問答



皇產靈尊。大日靈尊。此葦原瑞穗國。以奉我天  
祖彥火瓊杵尊。授此時運。鴻荒多時。  
草昧なり。正以養て。治多。皇祖皇考乃神。乃聖。  
慶々積曜。以連。多年所を歴多。天祖降臨。以  
以遠。今一百七十九万二千四百七十餘歳。然。遼遠  
地未王沢。霑も。邑は君あり。村は長あり。各自疆を  
分て。相凌ぐ。柳又監土老翁。聞日。東は養地あり。  
青山四は周も。其中に乞の磐船。乘て。飛降者。  
余謂。彼地必當。天業。弘は足ぬ。蓋六合の  
中心乎。其飛降者。謂。是饒速日歟。何就。

都せざらんや。乃さふ。諸皇子對曰。理實は灼ら。  
我亦垣は念らん。早行多。甲寅冬十月丁巳朔  
辛酉。天皇親諸皇子。帥て。舟師東征。多。春二  
月。皇師遂は東。多。方は難波。乃碇。到。以奔  
潮あり。不急。あいをいそいぬ。名て浪速。以國。示浪  
華。今難波。多。訛也。三月。流。溯て上。河  
内。國草香邑。青雲乃。自肩の津。到。夏四  
月。皇師以。勒兵。歩。龍田。趣。其路。嶮。人  
並行。以得。還て。東。方。膽駒山。あえて。中津  
洲。入。持。長髓。房。聞。夫天神。子等。

續前朝略三



来い必將は吾国に集る則属兵を起て孔舎衛  
 坂に傲て共は戦流矢ありて五瀬命に肱脛中礼  
 皇師進戦しわさる天皇憂あり乃神策以冲衿  
 運て曰今我日神の子孫おして目日向て虜以征と天  
 の道逆不若退き還て弱を示し神祇を禮祭  
 て背日神の威以負影乃隨に壓踏如此則刃  
 血わすずて虜必敗るる多矣日然是は於て軍中  
 令して曰且停勿後進乃軍以引て還る多矣虜亦  
 敢て逼む却て草香津に到て香以植て為雄  
 詰因て其津以改く者津と云今蓼津と云訛也時

長髓彦乃行人以遣て天皇言曰掌天神の子天  
 磐船に乗天より降止号て櫛王饒速日命と云吾  
 妹三炊屋姫以娶て遂は兒息あり名以可妻真手  
 命と申は故は吾饒速日命と君うて奉焉夫天  
 神の子宣兩種由んや奈何也更は天は神の子と  
 称る人れ地と集や吾心推之未必信と云天皇曰天神  
 の子亦多耳汝君とす所是實は天神の子ありハ  
 必表物ありん可相示之長髓彦即饒速日命は天の  
 羽々矢一隻及步鞞以以く天皇は奉示天皇賢之曰  
 事不虛との心して還て所御天は羽々矢一隻及







御間城入彦五十瓊殖天皇と。宗神天皇と謚此天皇  
十九歳よりして立て皇太子とかり給。既寛博謹慎  
ありて神祇に重し恒々天業に經綸しし多ふ心お  
り。元年春正月壬午朔甲午皇太子天皇に位し即  
ち皇后に尊んで皇太后と申す。五年国内に疾疫多  
く民死亡とふり。大半のん。六年百姓流離し或  
ハ背叛ありて其勢徳よく治りし。是より晨  
は興々として揚て罪に神祇に請。是より天照太神和  
ハ大國魂の二神並に天皇大殿の内は祭然し其神  
ハ勢と畏し共し住不安故天照太神とて豊鍬入姫

命は託り給て倭の笠縫邑に祭示日本大國魂  
神代淳名城入姫命に託りて祭し。是神鏡大殿  
と出のふ始也。七年春詔曰昔我皇祖大は鴻基に啓  
其後聖の業逾高王風博盛意よりき。今朕が世  
當て敷災害わん。は恐らく朝に善政あり。各  
以神明を取やとの。大國魂の神に祭示し  
十萬神と祭仍大社国社及神地神と定多し。是より疫病始  
息国内漸謚五穀既成て百姓饒。十年秋詔して曰民と導れ  
本教化あり。今神祇と礼て災害皆耗ぬ。然るも遠荒の  
人等正朔と受す。王化は習ふ。群御等以選て四



方に遣し。朕ク思ふ。九月。大命。氏。北陸。遣武。停川。別。東海。遣吉備津彦。西。道。遣丹波道主命。丹波。遣。因。詔曰。若。教。受。の。兵。と。奉。て。伐。之。既。共。と。仰。授。て。將軍。是。四。道。將軍。本。朝。將軍。是。始。下。の。從。の。氏。從。一。事。此。例。也。十。月。群。臣。詔。曰。今。返。者。悉。誅。伏。幾。内。事。唯。海。外。荒。俗。騷。動。未。止。其。四。道。將軍。等。今。忽。發。之。將軍。等。共。矣。路。十。一。年。四。月。四。道。將軍。平。戎。夷。之。狀。奏。是。歲。異。俗。多。歸。國。内。安。寧。

十二年春三月。詔。朕。初。天。位。承。宗。廟。保。獲。明。蔽。取。有。德。綏。是。氏。以。陰。陽。謬。錯。寒。暑。不。序。失。疫。病。多。起。百。姓。災。蒙。然。今。罪。解。過。改。敦。神。祇。禮。亦。教。垂。荒。俗。綏。兵。奉。不。服。を。討。是。官。廢。事。下。逸。民。教。化。流。行。象。庶。業。と。樂。異。俗。譯。と。重。て。來。海。外。既。歸。化。是。天神。地。神。共。和。享。風。雨。時。順。百。穀。用。成。家。給。人。足。て。天。下。太。平。也。故。稱。御。肇。國。天。皇。也。六。十。五。年。秋。七。月。任。那。國。蘇。那。曷。叱。智。







く師と興べ則賊と滅よ多し多く兵伐動は是百姓の  
害何の鋒刃に威と假とて坐し其國と平時よ一臣  
の進曰熊襲衣梟師二女あり兄は市乾鹿文弟  
と市鹿文と云容既端正心且雄武宜重幣以示  
下小撫納固て以て其消息と伺て不意の處に犯  
則刃小血のすして賊必自敗と云天皇は詔く可也  
是よ於て幣以示て其二女を欺て幕下に納天皇則  
市乾鹿文は過く陽寵えぬ時市乾鹿文天皇よ  
奏して曰熊襲は不服と云無愁のゆゑ妻良謀  
あり即一二の兵は已よ令從而家よ返て以て醇酒と

多設て己は飲しめ乃酔て寐市乾鹿文密よ父  
の弦断爰よ從兵二人進て熊襲梟師と殺し此  
天皇則其不孝の甚と云惡めし市乾鹿文を誅  
仍て弟市鹿文火國に造よ賜十三年夏五月  
悉龍國に平く固て以て高屋宮よ居し己六年  
也廿七年秋八月熊襲亦及て邊境に侵し止む冬  
十月日本武尊に遣して熊襲と撃し時  
年十六是よ於て日本武尊曰吾善射者と得て  
よ行し或啓曰義濃國に善射者あり弟彦公と  
云是よ於て日本武尊葛城に宮を造り弟彦



ミヨ  
ムと喚故よ弟彦云便石占横立及八張の田子稻置  
乳近の稻置代平て来則日本武尊より從て行之十  
二月熊襲代国に到て其消息及地形乃埃易代伺  
時よ熊襲魁師者有り。名を取石鹿文亦川上臯  
師と云。悉親属代集て宴せん。是よ於て日本  
武尊。髪と解て童女に次女に密よ川上臯師に  
宴ハ時代伺。劍と裊の裏よ佩多ひて。川上臯師の  
宴の室よ入て女人の中よ居。川上臯師其童女の容  
顔よ感別。代携。席と同一て坏と奉て飲。く。て  
戲弄時よ更深人聞ぎぬ。川上臯師且被酒。是よ

於て日本武尊。裊中ハ劍と掛。川上臯師ハ胸と刺。多  
未及之死。川上臯師叩頭曰。且待多。吾有所言。時よ日本  
武尊。劍と留て待多。川上臯師啓曰。汝尊ハ誰人也。對曰。  
吾ハ是大足彦天皇の子也。名よ日本童男と云。川上臯  
師亦啓曰。吾ハ是國中ハ強力者也。是ハ以て。當時諸  
人我威力よ勝す。て從て。心よ。吾多武力に  
遇て。未皇子の。是ハ以て。賤賤  
陋口以て。尊号よ奉。若聽乎。目聽之。即啓曰。自今以  
後皇子代号多。日本武皇子と稱。今以  
言訖。乃胸代通て。殺多。故今よ到て。稱て日本武



尊し申は是其縁也。然後は矛盾を遣はして。悉  
 其黨類を斬餘もの唯一のむかひ。皇は之を林  
 問曰。日本武東夷征伐之事如何。  
 答曰。景行天皇四十年。東夷多叛て。邊境騷動し。秋  
 七月。元皇群卿。詔曰。今東夷国安らば。暴神多起。亦  
 蝦夷悉叛る。屢人民を略む。誰人と遣はして其乱を  
 平。群臣皆誰と遣はす。日本武尊奏  
 言。臣ハ則先。西征。勞是役。必大碓皇子ノ事カ  
 らん。時ハ大碓皇子。愕然。草中ニ逃隱。則使者ハ遣  
 て。召来。爰。元皇責て曰。汝不欲共。豈強遣邪。何未

賊。對す。以て。豫懼甚。固て。以て。義濃。封。是  
 於て。日本武尊。雄詰曰。熊襲既。平て。未幾も。命  
 今更。東夷。叛る。何。日。太平。速。臣。勞。と。い。其  
 乱。平。し。申。天皇。斧鉞。と。持。以。日本武尊。授。曰。朕  
 聞。其。東夷。之。識。性。暴。強。て。凌。犯。宗。之。村。長。ら。り。  
 邑。首。ら。各。封。場。と。貪。並。相。盜。略。亦。山。邪。神。わ。り。  
 郊。姦。鬼。わ。り。衢。遮。徑。塞。多。人。と。苦。し。其。東。夷  
 の。中。に。蝦。夷。是。尤。強。し。男。女。交。居。父。子。別。れ。あ。り。冬。々  
 則。穴。宿。夏。則。櫟。住。毛。と。衣。血。飲。て。昆。弟。相。疑。  
 山。登。り。飛。禽。の。と。く。草。と。行。く。獸。の。と。く。息。と



受之則忌。恐之必報。是必之。若之頭。誓之藏。刀  
 と衣中。佩。或ハ童類。と聚て。邊境。以犯。或ハ農桑。と  
 同て。人民。と略撃。と。則草。と。逃追。ハ。則山。と。入。故  
 往古。以。来。未。殊。王。化。也。今。朕。察。と。心。汝。の。人。と。身  
 体。長。大。容。自。端。正。力。能。鼎。と。扛。猛。と。雷。電。の。と。向  
 じ。の。前。を。及。じ。の。必。勝。即。知。ぬ。形。と。則。我。子。あ。り。て。  
 實。ハ。則。神。人。是。寔。ハ。天。朕。不。殺。且。國。の。不。平。ハ。天  
 啓。と。多。し。天。業。以。經。倫。宗。届。と。絶。と。び。ひ。り。汝。亦  
 是。天。下。ハ。則。汝。の。天。下。也。是。位。ハ。則。汝。の。位。也。願。と。深。謀  
 遠。慮。て。茲。と。探。て。變。と。伺。永。ハ。威。と。以。て。懷。と。德。と

以て。無。以。煩。と。て。自。令。臣。類。即。言。以。巧。め  
 て。暴。神。以。調。武。と。振。と。姦。鬼。と。攘。と。の。と。ふ。是。ハ。於。て  
 日本。武。尊。乃。斧。鉞。と。受。て。以。て。再。拜。と。奏。曰。嘗。西。征  
 の。年。皇。靈。ハ。威。と。頼。三。尺。劔。と。提。て。熊。襲。國。と。撃。未  
 狭。辰。も。る。賊。の。首。罪。ハ。伏。今。亦。神。祇。の。靈。と。り。  
 瓦。皇。ハ。威。と。往。て。其。境。と。臨。て。示。と。德。教。と。以。て。ん  
 猶。不。服。もの。あ。ハ。即。兵。以。奉。て。撃。之。仍。て。重。て。再。拜  
 之。瓦。皇。則。吉。備。武。彦。と。大。伴。武。日。連。と。命。多。し。目  
 本。武。よ。從。と。七。掬。脛。と。以。て。膳。夫。と。ん。冬。十。月。日。本  
 武。尊。登。路。之。狂。道。伊。勢。神。宮。以。拜。つ。倭。姫。命。と。辞



よひて曰。今天皇の命は被りて。亦征して諸の叛  
者以誅せん。故に辞之し。是に於て倭姫命、草薙の  
劔をり。日本武尊に授て曰。慎之莫怠也。是歳日本武  
尊。初て駿河に到。其處に賊陽に從て。欺て曰。是野の  
麋鹿甚多。氣は朝霧のぶく。足は茂林のぶく。  
臨て應將。日本武尊。其言は信よ。野中に入て。覓  
歎賊王に殺し。云情ありて。火を放其野に焼。王欺ぬと云。  
よひ知し。火を以て。折火に出して。向火焼にす。  
免し。火を得り。王曰。殆欺して。則悉其賊衆を焼て滅  
し。故に其處を号て。焼津と云。一云。王に佩し。劔藁

雲自抽て。三の傍に草薙の草に薙攘。是より免し。火  
得り。故に其劔を号て。草薙と云。亦相摸し進して。  
上総に往し。海に望高言曰。是小き海に。立跳り渡  
る。乃海中小到て。暴風忽に起り。王海漂蕩て。渡へ  
ず。時王に從ま。のら。妾弟橘媛と云。穗積氏忍山宿  
禰の女也。王に啓曰。今風起波渺し。王に船没し。是必海  
神心也。願ひ妾を身とみ。王の命は贖し。海に入  
言訖て。乃瀾に投て。入ぬ。暴風即止。船岸に著る。火  
得り。故に時人其海を号て。馳水と云。爰に日本武尊。  
則上総より。轉て陸奥國に入。時大鏡に王に懸る。



海路ウミミチより葦浦アシウラに廻り横ヨコに玉タマの浦ウラに渡り蝦夷エビスの境サカイに到いたり蝦夷エビスの賊首エヒラカミ嶋津神シマツカミ國津神クニツカミ等ら竹タケのミ水門ミヅカド耳ミミ屯イハミて距マシる然シカ遣ハる王ミコ船フネを視ミて豫アハカシめ其ノ威勢イセ以テ怖コソて心ココロ裏ウラに不可勝イカニモエツラズキしヲ以テ知チて悉シく弓ユミ矢ヤを捨ス望ノゾミ拜マツル日ヒ仰アゲ視ミる君キミの容人イハヒト倫ニ秀スる若シ神カミ乎カ欲ヒ知チ姓名ナニナニ王ミコ對テ曰ク吾ハ是レ現人イマヒト神カミの子也コノミヤゴトナリ是レに於テ蝦夷等エビスノラ悉シ慄オソ則シテ裳キモノ以テ蹙カケ浪ナミと披ウケて自王ミコ船フネと技タカて岸キに著ツク仍シテ面縛オモツカサスレて服罪レタカフ故ニ其罪ミツメを免ユルし給ト因テ以テ其首ミツメ師シと俘トリりて令ミコトシラカフ從ツラ自也ミツメ蝦夷既エビスに平ヒラぬ日高見國ヒタカミより還ヘテて西南方シウナンカタ常陸ヒタチに歴ヘテ甲斐國カヒに到いたり酒折宮ササヅミヤに居イ時トキに奉ホトモ燭スして進食シラシム日本武

尊ミコ曰ク蝦夷エビスの首ミツメ咸シテ其罪ミツメに伏シ唯レ信濃國シノノ越國エチノ頗オソク化カは從ツてシ則シテ甲斐カヒより北キタ武藏ムサシ上野ウツノに轉メ歴レて西ニ碓日坂ウツヒノサカに逮イタり海ウミに河カハは日本武尊ニッポンタケノミコ毎スに茅橋チノハシ姫ヒメと願ネガふ情シヨロあり故ニ碓日嶺ウツヒノミネに登ノボりて東南トウナンの方カタに望ホシて三嘆ヒトツク曰ク吾孀ウツメノハヤ者ナリ耶ヤ故ニ因テて号ナヅケ多タ山ヤマの東ヒガシの諸シヨの國クニと吾孀ウツメノハヤの國クニとをシ是レに於テて道ミチに分ワケて昔ムカシ備武彦ヒツツノヒコ越國エチノに遣シり其ノ地形チノカタチは峻ツルギ易ヤシ及ヒ人ヒト民タタの煩ワザ否イナク云フと以テ以テ監察ミセシム則シテ日本武尊ニッポンタケノミコ信濃シノノに進イ入ニ是レ國クニや山ヤマ高タカク谷タニ幽フカク翠スズキ嶺ミネ万重マンジュウあり人ヒト倚ツク杖ツカヒて升ノボりて岩イハ嶮ヤカシく磴カケ紆マダクり長タカキ峯タケ數タカシ千チ馬ウマ煩ワザ纏マツて不ユカス進イ然シテ日本武尊ニッポンタケノミコ烟ケリ火ヒ披ウケ霧キリ凌シぎ遙トホクに大山オホヤマに徑ミヤブり既イに峯タケに逮イて飢ツカ

貫介問答三

十一



之の山の中は食す。山神王と苦みく。白鹿は化て王の前  
に立王異ありて。一ヶ蒜とみく。白鹿は弾く多む。則眼  
中て殺しは爰王忽道と迷ひ。出所とみく。時  
白狗自来て王と導の状わり。狗は随て行く。美濃  
出とみ得多り。吾備武彦越より出て。遇之。是より先  
信濃坂。度もの多神の氣と得て。瘡卧。但白鹿は  
殺し。後。是山と踰もの蒜は嚼て。人及牛馬は塗  
自神の氣に中らば。今も疫疾行。此門外蒜  
とみく。是より興もろ。日本武尊。更尾張は還。内  
て。即尾張氏の女。宮篁媛は娶て。淹留。月と踰

の。是より。近江。膽吹の山。荒神あり。聞。即  
と解。宮篁姫の家。置て。徒より行。胆吹山。到  
て。山神大蛇と化て。道。當り。日本武尊。主神の  
蛇と化と云。は。謂。是。大蛇。必。荒神の  
使。人。既。主神と殺。は。得。豈。求。足。哉。因  
て。蛇。跨。行。猶。行。時。山神。雲。興。水。零。峯  
霧。谷。瞳。行。路。乃。棲。遑。其。跋。涉。所。と  
ど。然。霧。と。凌。強。行。方。僅。出。は。得。多。り。猶  
失意。醉。と。因。て。山下。の。泉。側。居。乃。其。水。と  
飲。醒。ぬ。故。其。泉。と。名。て。居。醒。泉。と。之。日本武尊。



始て痛身多ふ。然稍起て尾張に還。爰に宮簀媛の  
家に入らば、便伊勢に移て尾津に到能。廣野に  
遠て痛多ふ。甚く則所停蝦夷等と云く神宮  
に献。因て吉備武彦と遣。天皇に奏曰。臣命と天朝に  
受。遠東夷と征。則神の恩に被。皇の威に頼て。叛  
者罪に伏。荒神自調。是と云く。甲辰卷。戈辰戰。檀梯  
て還礼つ。曷日曷の時。天朝に復命。と云く。莫然天  
命。忽至。隙駟停め。是と云く。獨曠野に卧て。  
誰か語ら。豈自の云ふに。措じや。唯愁不面  
か。つら。既して能。廣野に崩。時。年三十

天皇聞て。寢て不安。席食して不耳。味。晝夜唯咽泣。  
悲。標擗ら。因て云く。大に歎て曰。我子小碓王。昔熊  
襲叛。目未及。松角。久征伐。煩く。既して恒に  
左右にありて。朕に不及。神。然東夷騷動。討し。以  
んか。愛と忍て。賊の境に入。一日も不顧。と云く。  
是と云く。朝夕進退て。還日。代侍。何禍と。何罪と  
も不意。我子。候云。今。以後誰か。と云く。鴻業  
と。經倫耶。即。羣卿に。詔。百官に。命。仍伊勢國に。能廣  
野。陵に。葬。時。日本武尊。白鳥に。化。る。陵。に。出。く。  
倭國に。指。て。飛。群臣等。因。以。く。其。棺。櫬。を。開。て。視



明衣空留て屍骨なく。是に於て使者を遣て白鳥  
追尋ハ則倭乃琴彈乃原に停。仍其處に陵代  
造に白鳥更飛河内に到。旧市邑に留亦其所  
に陵に依。故に時の人三陵と号て白鳥陵と云。  
然遂に高翔天に上。徒に衣冠と葬。因て功名  
を録之と欲て。即定武部也。  
○問曰神功皇后三韓に退治し。由は如何か。事  
そや

答曰。人皇十四代足仲彥天皇に仲哀天皇と謚。天皇  
二年春正月氣長定姫尊と立て。皇后より則神功

皇后と謚也。仲哀天皇二年三月南の國に巡狩。是に於  
て。皇后及百寮を留て。駕に從せり。二三の卿大夫  
及官人數百わたりて。輕行之。紀伊國に到て。德勤津宮  
に居。是時に熊襲叛て。朝貢せらば。天皇是に於て。  
將に熊襲伐伐せ。則德勤津に發て。浮海して  
穴門に幸。八年春正月築紫に幸て。檀日宮に居。た  
ゆ。秋九月群臣に詔して。以て熊襲討て。代議  
の時。神に仰て。皇后に託て。誨曰。天皇何。熊襲乃  
不服。憂多。是。藩の空國也。豈兵に奉て。伐よ  
足や。茲國に愈て。寶乃國あり。譬に養女に嫁乃如き。



向津国あり。眼炎は金銀彩色多し其國より是と  
考案新羅國と云。若く吾代系は白く。則ち  
血のくびりて其國必自服あり。後熊襲も服あり其祭  
は天皇の御船及穴門直踐立は所献の水田名大  
田と云。氏以て為幣也。天皇神の言は聞て疑の情有  
便高岳に登。遙く望之大海曠遠。く國も見ゆる  
是に於て天皇神は對曰。朕周望の海ありて國あり。  
豈大慮の國ありや。誰れ神。徒に朕を誘や。復我皇  
祖諸天皇等。尽し神祇を祭あり。豈遺神ありや。  
時神亦皇后は託曰。天津水影ありて。押伏て我

所見國は何國か。謂て我言は誹謗あり。其汝  
王の如此言て。遂不信。汝其國と不得。唯今皇后  
始て有胎。其子獲あり。然天皇猶不信。以て  
強し熊襲を撃つ。由不得勝。て還之。九年  
春二月。癸卯朔丁未。天皇忽し有病。自而明日。崩  
じ。時皇后天皇神の教は不從。て早崩を由  
ゆ。傷て。以為崇所。神は知財寶國と未と欲  
て。群臣及百寮は命して罪を解。過は改て。更し  
齋宮と小山田の邑を造。三月壬申朔。皇后吉日。以選  
ひ齋宮。入親神主と為。ゆ。て。則武内宿禰



命して琴撫一ひ。中臣烏賊津の使主と為審神  
者因て千縉高縉と以て琴頭尾に置いて請曰先  
皇の教ふひ一ひ誰神也願之其名氏知し欲と  
七日七夜は速て乃答曰神風伊勢國の百傳度逢  
縣折鈴五十鈴宮に所居神名撞賢木嚴之御  
龜天疎向津姫命亦問是神氏除て神有や答  
曰播菽穗の出吾也於尾田吾田節の淡比郡に所  
居之有也問亦有耶答曰於天事代於虛事代玉  
籥入彦嚴之事代神有之也問亦有耶答曰有無  
之不知焉是に於て審神者曰今答を以て

て更後一言し何の則答曰日向國の橋小戸之水  
屋に所居水葉稚之出居神名々表筒男中筒  
男座筒男神之有也問亦有耶答曰有無之不知  
焉遂に且神ありて不言時神語以て得て隨教  
小して祭然後吉備臣祖鴨別と遣て熊襲國と  
擊し未決辰経とて自服ぬ夏四月北火前國に  
松浦の縣に到て玉嶋の里に小河の側に進食是に於  
て皇后針と勾釣以て為つと粒を取て餌と裳と系  
と抽取て緡小して河中石の上に登て釣以て祈  
之曰朕西財の国と求む若成事ある河與飲釣



因て以て。竿<sup>ツラ</sup>以<sup>テ</sup>奉<sup>ケ</sup>て。細鱗<sup>コナシ</sup>を獲<sup>テ</sup>。時<sup>ニ</sup>は皇后<sup>クハク</sup>曰<sup>ク</sup>希見<sup>シ</sup>物<sup>ナリ</sup>也。故<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>其處<sup>ヲ</sup>と号<sup>ケ</sup>て。梅豆羅國<sup>ウメマシ</sup>と云<sup>フ</sup>。今<sup>ニ</sup>松浦<sup>マツウラ</sup>と云<sup>フ</sup>也。故<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>其處<sup>ヲ</sup>と号<sup>ケ</sup>て。梅豆羅國<sup>ウメマシ</sup>と云<sup>フ</sup>。今<sup>ニ</sup>松浦<sup>マツウラ</sup>と云<sup>フ</sup>也。訛<sup>ヒ</sup>焉<sup>ナリ</sup>。是<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>其國<sup>ノ</sup>の女人<sup>ヲ</sup>。四<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>上旬<sup>ニ</sup>。當<sup>ル</sup>ふと云<sup>フ</sup>。釣<sup>チ</sup>と云<sup>フ</sup>。以<sup>テ</sup>河中<sup>ニ</sup>。投<sup>ゲ</sup>て。年<sup>ヲ</sup>莫<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>捕<sup>ル</sup>。今<sup>ニ</sup>は絶<sup>ト</sup>也。唯<sup>ニ</sup>男<sup>ヲ</sup>夫<sup>ヲ</sup>釣<sup>ル</sup>と云<sup>フ</sup>。之<sup>レ</sup>も。莫<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>。既<sup>ニ</sup>て皇后<sup>ノ</sup>。則<sup>チ</sup>神教<sup>ノ</sup>の驗<sup>ヲ</sup>。あつた。以<sup>テ</sup>識<sup>ル</sup>て。更<sup>ニ</sup>神祇<sup>ヲ</sup>と祈<sup>ル</sup>祭<sup>ル</sup>。躬<sup>ニ</sup>西<sup>ニ</sup>征<sup>ス</sup>。多<sup>ク</sup>由<sup>リ</sup>之<sup>レ</sup>。爰<sup>ニ</sup>神田<sup>ニ</sup>と定<sup>ム</sup>て。佃<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>。時<sup>ニ</sup>は。饑<sup>カ</sup>河<sup>ノ</sup>の木<sup>ヲ</sup>と引<sup>テ</sup>。神田<sup>ニ</sup>潤<sup>ラ</sup>して。溝<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>掘<sup>リ</sup>。迹<sup>ヲ</sup>驚<sup>カ</sup>。以<sup>テ</sup>固<sup>ク</sup>及<sup>テ</sup>。大<sup>ニ</sup>磐<sup>ヲ</sup>塞<sup>テ</sup>。溝<sup>ヲ</sup>と穿<sup>リ</sup>。以<sup>テ</sup>得<sup>ル</sup>。皇后<sup>ノ</sup>武内<sup>ノ</sup>宿禰<sup>ヲ</sup>と云<sup>フ</sup>。以<sup>テ</sup>鏡<sup>ヲ</sup>と捧<sup>テ</sup>。神祇<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>禱<sup>ス</sup>。由<sup>リ</sup>て。溝<sup>ヲ</sup>と通<sup>ス</sup>。以<sup>テ</sup>求<sup>ル</sup>。則<sup>チ</sup>當時<sup>ニ</sup>。雷<sup>ノ</sup>電<sup>ノ</sup>。

塵<sup>チ</sup>其磐<sup>ノ</sup>石<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>蹴<sup>リ</sup>裂<sup>テ</sup>。水<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>通<sup>ス</sup>。以<sup>テ</sup>改<sup>メ</sup>。時<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>其溝<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>号<sup>ケ</sup>て。裂<sup>レ</sup>衣<sup>ヲ</sup>田<sup>ノ</sup>溝<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>。皇后<sup>ノ</sup>還<sup>ル</sup>て。檀<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>浦<sup>ニ</sup>詣<sup>リ</sup>て。髮<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>解<sup>キ</sup>て。海<sup>ニ</sup>臨<sup>ミ</sup>曰<sup>ク</sup>。吾<sup>レ</sup>神祇<sup>ノ</sup>の教<sup>ヲ</sup>。被<sup>テ</sup>皇祖<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>靈<sup>ヲ</sup>。以<sup>テ</sup>頼<sup>ル</sup>。滄<sup>ノ</sup>海<sup>ニ</sup>と浮<sup>リ</sup>。涉<sup>リ</sup>て。躬<sup>ニ</sup>西<sup>ニ</sup>征<sup>ス</sup>。是<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>。今<sup>ニ</sup>頭<sup>ヲ</sup>と海<sup>ノ</sup>水<sup>ヲ</sup>と。僕<sup>ニ</sup>若<sup>ク</sup>。驗<sup>ヲ</sup>あつた。髮<sup>ヲ</sup>自<sup>ラ</sup>分<sup>テ</sup>て。兩<sup>ニ</sup>を分<sup>テ</sup>。即<sup>チ</sup>海<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>洗<sup>フ</sup>。髮<sup>ヲ</sup>自<sup>ラ</sup>分<sup>テ</sup>。皇后<sup>ノ</sup>便<sup>ニ</sup>結<sup>ビ</sup>。分<sup>テ</sup>髮<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>髮<sup>ス</sup>。以<sup>テ</sup>因<sup>リ</sup>。群<sup>臣</sup>謂<sup>フ</sup>曰<sup>ク</sup>。夫<sup>レ</sup>軍<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>興<sup>ス</sup>。衆<sup>ヲ</sup>と動<sup>ス</sup>。國<sup>ノ</sup>の大事<sup>ナリ</sup>。安<sup>ク</sup>危<sup>ク</sup>成<sup>ル</sup>敗<sup>ル</sup>。必<sup>ズ</sup>斯<sup>ニ</sup>あり。今<sup>ニ</sup>征<sup>ス</sup>。伐<sup>ス</sup>。以<sup>テ</sup>事<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>。群<sup>臣</sup>以<sup>テ</sup>付<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>。若<sup>ク</sup>事<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>成<sup>ル</sup>者<sup>ハ</sup>。罪<sup>ヲ</sup>群<sup>臣</sup>に有<sup>リ</sup>。是<sup>レ</sup>甚<sup>ク</sup>傷<sup>ム</sup>。吾<sup>レ</sup>婦<sup>女</sup>少<sup>ク</sup>。以<sup>テ</sup>加<sup>ヘ</sup>以<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>肖<sup>ス</sup>。然<sup>レ</sup>暫<sup>ク</sup>男<sup>ノ</sup>貌<sup>ヲ</sup>と假<sup>シ</sup>て。強<sup>ク</sup>雄<sup>略</sup>と起<sup>ス</sup>。上<sup>ニ</sup>神祇<sup>ノ</sup>の靈<sup>ヲ</sup>。

貴介問答三

三



と蒙下ハ群臣の助ヲ藉テ兵甲以振テ嶮波と度艦  
船と整テ以テ財土と求。若事就バ羣臣共ニ功あり。  
事就ト人ハ獨罪あり。既ニ此意あり。其共ニ議之。群臣  
皆曰。皇后天下ヲ為ニ計。宗廟社稷ト安テリ所以ハ  
且罪臣下ニ不及頓首奉詔。秋九月。諸國ニ命一船  
船ト集テ。兵甲以練。時軍卒集ル。皇后曰。必神  
心ありん。乃ニ多シテ。則大ニ輪社ト立。以テ刀矛ト奉  
ル。軍衆自聚。是ニ於テ。吾先海人鳥摩呂ト云ト使  
テ。西海ト出國あり。以テ家ト還テ曰。國ももくど  
と。又磯鹿海人石草ト遣テ。觀テ。數日テ還

て曰。西北有山。帶雲橫組。蓋國ありん歟。爰ニ吉日ト  
テ。臨發ト有日。時ニ皇后親斧鉞ト執。以テ三軍  
ト令曰。金鼓無即。旌旗錯乱。すべからず。則士卒不整  
財ト貪多欲私ト懷テ。内顧セハ必敵ノ為ニ所虜。其  
敵少トシ。勿輕敵。強トシ。無屈。則好暴トハ勿聽。自服  
トハ勿殺。遂ニ戰勝者。小ハ必賞ありん。背走者。大ハ自  
罪ありん。既ニ以テ神誨あり。て曰。和魂ハ玉身ト服テ。  
壽命ト守。荒魂ハ先鋒トシテ。師船ト導。即神教ト  
得テ。并礼之。因テ以テ。依網吾彦男垂見。以テ祭神主  
トシ。時ニ適。皇后ハ開胎トヤ。皇后則石ト取。腰ト



擇て祈て曰。事竟還日。茲上は産く由へ其石今  
 伊都縣道邊より。既よりして荒魂と偽て軍ハ先鋒  
 小和魂以請て王船の鎮は冬十月和珥津に  
 發多ふ時。飛廉風と起し。陽侯浪と拳海中大魚  
 悉浮船と挾。則大風頰と吹て帆船波と隨櫓楫と不  
 勞して便新羅に到。時隨船潮浪遠く國中。小速  
 即天神地祇悉は助るふ。知ぬ新羅王。是は於て  
 戦々栗々。盾身無所。則諸人と集て曰。新羅ハ國ハ  
 建より以來。未嘗聞ず。海水凌國。若天運之。て  
 國海水と。か。歎。是言未訖。の間。船師海は滿旌旗

日。暉鼓吹聲と起。山川悉は振。新羅王遙は望て。お  
 ららく。非常ハ兵將。己國と滅し。龍言て。矢志ぬ。乃  
 今醒日。吾聞東は神國あり。日本と。亦聖ハ王あり  
 天皇と云。必其國ハ神兵ありん。云。豈兵と奉て。以て  
 距へんや。と。即素旆あげて。自服ひぬ。素組  
 して。面縛圖籍と封て。王船の扉は降て。固て以て。叩  
 頭日。從今以後。長乾坤と伏て。飼部とあり。其船柁と  
 不乾して。春秋馬梳及馬鞭と献。復海遠は煩。何ん  
 して。毎年は男女の調と貢。則重て誓日。東日更は  
 西は出は非むん。且阿利那。礼河の返て。以て。送は流



河石ハ昇ホトて星辰アツアカホレヲ為ナす及キずして殊ニ春秋ノ朝ハハ  
關カキ悉シて梳クレ鞭ムチノ貞ミツキハ廢ヤメつて神地ニ祇シて討ツクふ  
中ノ時ト或アル日ヒ新羅ノ王ヲ欲コロ誅ス之ヲ是ノ於テ皇后曰初ハ  
神教ハ承テ將シ金銀ノ國ハ授ケり又三軍ヲ号シ  
令曰自服ハ勿オ殺ス今既ニ財國ヲ獲エ亦人自降服ハ殺ハ  
不祥トのコトをシて乃チ其縛ヲ解シて飼部ヲ遂ニ其國  
中ニ入リ重寶ハ府庫ヲ封圖籍ノ文書ヲ收メ即ニ皇后  
ハ所杖ヲ以テ新羅ノ王ノ門ニ樹ル後葉ハ印ノ為シ  
とシ故ニ其矛ヲ今猶ニ新羅ノ王ノ門ニ樹ル爰ニ新羅ノ王  
波沙寐錦即微叱已知波珍于歧以質して

仍テ金銀彩色及綾羅練絹ヲ賫シ八十般般船ヲ載シ入テ  
官軍ニ從ヒ是ハ以テ新羅ノ王常八十般般船ノ調子  
とシ日本ノ國ニ貢ス其是ノ縁也是ノ於テ高麗百濟ニ  
二ノ國ノ王新羅圖籍ハ收メ日本ノ國ニ降シ聞テ密ニ  
其軍勢ト伺ヒ小則勝を知ル自ラ  
營ノ外ニ來テ叩頭歎曰從今以後永西藩稱シ  
朝貢ト不絶故因テ以テ内官家ト定ス是ノ所謂也  
三ノ韓也皇后新羅より還ル十二月戊戌朔辛亥  
譽田天皇以テ築紫ニ生ル故ニ時ノ人其産處ハ  
号テ宇瀨ト云也



是ノ字樹ノカ

譽田天皇ノ樂者。注ノ好ノ部ノ其意也。

三韓ノ皇曰。博羅ノ國ノ十二月乃其降辛亥。

博羅ノ不遠也。同ノ人ノ内官家ノ其是也。

當ノ水ノ来ノ下頭博羅。此今ノ好ノ木西藩ノ林。

其軍博ノ同ノ人ノ博羅ノ其是也。

一ノ國ノ王條羅國蘇ノ人ノ日本國ノ判ノ開ノ密。

一ノ日本國ノ責其是ノ人ノ其是也。

博羅ノ其是ノ人ノ其是也。

貴介問答卷之三終



